

# アルノルト・シュミッツ著：Die Bildlichkeit der wortgebundenen Musik Johann Sebastian Bachs の内容に関する一考察

片岡啓一

## はじめに

アルノルト・シュミッツ (Arnold Schmitz 1893–1980) 著：Die Bildlichkeit der wortgebundenen Musik Johann Sebastian Bachs …ヨーハン・ゼバスティアン・バッハの言葉と結び付いた音楽の表象性…(初版は1950)は、バッハ (Johann Sebastian Bach 1685–1750) の音楽を研究する者にとって極めて重要な文献資料のうちの一冊であり、同書は、多くの研究者によって多様な視点から紹介され、それが論述の際の大切なより所となったり、時には研究者の論旨を際立たせるための批判的対象として考えられることもある。同書は、バロック時代の作曲法であるムジカ・ポエティカ (musica poetica) において中心的な役割を演じたフィグーレンレーレ (Figurenlehre) に関する専門的な研究書であるが、バロック時代の音楽を解釈するために、当時の音楽に対する音楽家達によって立つ歴史的基礎を修辞学の領域と関係の深いフィグール (Figur) に求め、フィグーレンレーレの歴史や研究史等、フィグール全般に関する諸々の説明が幅広い視野の基に書き進められ、更には、それが実際に言葉と結びついたバッハの作品においてどのように具現されているかを説得力のあるかたちで論述している。

同書は、音楽的象徴の立場からバッハの音楽を解釈しようとするシュヴァイツァー (Albert Schweitzer 1875–1965) やピロ (André Pirro 1869–1943) やシェーリング (Arnold Schering 1877–1941) の見解に極めて批判的な立場を取っており、その点に関する著者の学的立場には多大な興味と関心を喚起する独特な魅力が感じられる。

本研究は、このシュミッツの著作の内容について、それを音楽的象徴の問題と対比・関係させることを考慮しつつ、それ以外のことも含めて、全般的な検討・考察を行うことを目的としている。

## I Die Bildlichkeit der wortgebundenen Musik Johann Sebastian Bachs の内容について—その概要の紹介—

種々の著書・論文等における研究者達による同書の引用・紹介は、殆どの場合、私が「はじめに」のところで述べた内容程度か、或いは、それに若干の具体的なフィグールや譜例の引用が加わる程度のもので、全体がどのような構成になっていてどのような書き方が行われているかを、それ以上に突っ込んで触れているものは見当たらないような気がする。私としても、同書の内容の紹介について、それほどたくさん分量を費やすことはできないけれども、一応同書の内容の全体的輪郭が把握できる

程度の概要を、以下に紹介しておきたいと思う。

全体は、序論的な部分に続いて四つの章が置かれ、最後に結論的な部分があるので、同書は一応六つの部分構成から成っていると考えることができよう。

序論的な部分 (pp. 15-19) では、同書によって立つべき学的立場や、研究内容の目的についての言及が行われている。シュミッツは、音楽における表象性の問題は、純粋に美学的に解明され得るものではなく、心理学的な視点や歴史学的な視点からの究明が重要であると述べている。…この後、シュヴァイツァー・ピロ・シェーリング等に対する批判が続き、フィグーレンレーレに関する研究に寄与したブランデス (Heinz Brandes) やウンガー (Hans Heinrich Unger) が紹介されている。…そしてこの序論的な部分の最後のところで、シュミッツは、同書の研究の目的は、バッハの音楽が音楽的雄弁術に基づいていることを示すと共に、フィグールそのものを説明 (解明) することをも目指していることに触れ、そのことを通じて最終的にはこの研究がある特定の解釈学を意図したものであることを主張している。

第一章 (I) (pp. 21-36) は、フィグーレンレーレの歴史について、詳細かつ具体的に、時には譜例もまじえつつ説明が行われている。以下にその概略を示しておくことにする。…音楽と修辞学とは古代以来バッハとヘンデル (Georg Friedrich Händel 1685-1759) の時代までは密接な関係を有していたが、啓蒙主義の時代に入ると、それらの関係は崩壊してしまった。音楽と修辞学との関係についての古い時代の研究は少ないが、ネーデルランドのモテット芸術には、既に両者の関係がはっきりと認められる。そして17世紀の終わり頃には、ドイツではブルマイスター (Joachim Burmeister 1564-1629) がフィグーレンレーレの論文を書き上げた。一方イタリアにおいても、1600年頃にペーリ (Jacopo Peri 1561-1633) やカッチーニ (Giulio Caccini 1545頃-1618) は、修辞学に対する新しい関係を打ち立てた。モンテヴェルディ (Claudio Monteverdi 1567-1643) においてもその流れは受け継がれ、音楽的雄弁術の発展が明確なたちで確認できる。その流れは、一方ではシュッツ (Heinrich Schütz 1585-1672) からバッハへと受け継がれ、又他方ではカリッシミ (Giacomo Carissimi 1605-1674) からヘンデルへと受け継がれた。音楽的雄弁術は本来声楽様式と直結したものであるが、それは器楽分野にも浸透して行き、その流れは、マッテゾン (Johann Mattheson 1681-1764) に至るまで変わることなく受け継がれていった。声楽も器楽もその時代は共に「語る」というイメージによって理解されるのである。…第一章はこのような感じで論述が進み、以下、複数の音楽家や理論家による種々のフィグールの分類やフィグール自体の説明が行われているが、同章に関するこれ以上の具体的な説明は省略することにする。

第二章 (II) (pp. 37-50) では、バッハの音楽が修辞学と密接な関係を有していることを、彼の作品とも関係付けながら論述が行われている。基本的な点においては、第三章も第四章も第二章と論述の趣旨は同じであるが、各々の場所で扱われるバッハの作品がいろいろと変化したり、フィグールの種類も広がりを見せ、最後の結論の部分に近づくにつれて、彼の音楽と修辞学との関係がより一層客観的にかつ具体的に理解できるように配慮が施されている。ここでは第二章の概要を以下に述べておくことにする。…バッハの修辞学、とりわけフィグーレンレーレとの関係は、歴史的にも伝記的にも確認され得るもので、バッハの音楽を批判したシャイベ (Johann Adolf Scheibe 1708-1776)

に対して、バッハの音楽を修辞学的立場から弁護したビルンバウム修士（Johann Abraham Birnbaum 1702–1748）の言葉は大切な証言の一つであるといえよう。シャイベはバッハに対立し、アフェクト保持的フィグールには関心を示したが、古い時代の文法的フィグールは考慮に入れなかったけれども、後者のフィグールもバッハの音楽において大切な役割を果たしていた。バッハ自身や弟子達はフィグールに関する具体的な言葉は残していないし、我々が知っているのはバッハが弟子に言葉の情緒に注意を向けるようにということを行ったことのみである。しかしながら我々は、16世紀～18世紀の音楽やアフェクトの表現のためにはフィグールの存在は不可欠であることを知っているし、シャイベでさえもそのことはよく承知していたのである。…第二章はこのような感じで論述が始まり、この後は、譜例（ヨハネ受難曲・カンタータ第38番・ロ短調ミサ曲等）に基づきながら、種々のフィグールの説明が行われているが、同章のこれ以上の具体的な説明は省略することにする。

第三章（Ⅲ）（pp. 51–75）は、第二章の続きという風に考えて差し支えない部分で、譜例（カンタータ第60番・〈オルガン小曲集〉より“Durch Adams Fall ist ganz verderbt”）を用いて説得力のあるかたちで多様なフィグールを説明しているが、その詳細についてはすべて省略することにする。

第四章（Ⅳ）（pp. 77–83）は、第三章の論述を継続させたものであり、ここでは、〈オルガン小曲集〉の中の“Komm, Gott, Schöpfer, heiliger Geist”とマタイ受難曲の譜例によってフィグールが説明されている。その詳細についてはすべて省略することにする。

第四章が終わった後、最終的な結論の部分が2頁にわたって書かれている（pp. 85–86）。以下にその内容をまとめておきたい。…この部分でシュミッツは、フィグールはバッハの音楽における芸術的表現に大きな寄与をしているが、それは決して芸術家を束縛するものではないこと、同書の最終的なねらいはフィグーレンレーレを通じてのある特定の音楽解釈学の確立にあること等を述べている。…

## Ⅱ Die Bildlichkeit der wortgebundenen Musik Johann Sebastian Bachs の内容について—その内容に関する若干の考察—

本章においては、同書の内容について、その重要性や問題点、或いは更に検討を加えるべきであると思われる案件等について、私自身がシュミッツの見解について全般的に考えたり感じたりしたことを、（時にはバッハ音楽における象徴的表現の問題とも関係させながら、）以下に簡条書きのかたちで言及・提示することにした。

### ◎バッハ研究に果たす同書の重要性について

(1) シュミッツは同書において、バッハの音楽を解釈する際に、シュヴァイツァー・ピロ・シェーリングといった研究者達の象徴的表現の視点を厳しく批判し、彼らの研究がバロック時代全般における作曲の発想の土台となる歴史的・文化的基盤を無視していることを明確に指摘しており、バロック時代の作曲法の基盤であるフィグーレンレーレの世界について、多くの資料を駆使しながら説得力のあるかたちで極めて具体的に論述を行っている。即ち同書は、バッハを含めてバロック時代の音楽家

達に共通する精神構造の重要な側面を客観的なかたちで我々に示してくれている。シュミッツのこのような視座は、ややもすると、偏った個人的で主観的な発想の基にバッハの音楽を現代的な感覚のみで把握しようとしがちな我々に対して、時代精神の正確な把握の大切さを教えてくれるものである。

(2) 同書には、バロック時代の音楽家や音楽理論家達のフィグーレンレーレに関する考え方がいろいろと紹介されているが、その中でも特に興味深いものの一つに、バッハ自身個人的に大変親しく付き合った仲で、オルガン・コラールの作曲においては互いに強い刺激を与え合ったヴァルターの見解がある。<sup>1)</sup> (同書でも時々引用されているが、) 彼の著になる「作曲法教程」(Praecepta der musicalischen Composition 初版は1708) や「音楽辞典」(Musicalisches Lexicon oder musicalische Bibliothek 初版は1732) の内容は、ムジカ・ポエティカそのもの、或いは言葉と結び付いたバッハの音楽について考える時、大変重要なものであると思われるが、シュミッツは幅広い視野の基に、その論述中でヴァルターの見解の重要性を的確に把握しているように感じられる。<sup>2)</sup>

(3) フィグーレンレーレについては、シュミッツ以前にもブランデスやウンガーの研究があり、彼自身もウンガーの研究については同書の論述中でたびたび引用している。ただブランデスやウンガーの研究においては、フィグールによる分析法の重要性は理解できても、それが、真に有機的かつ活性化されたかたちで実作品を分析し得るものかどうかについては、どうも今一つあいまいな印象を受けるが、その点に関するシュミッツの論述は、フィグールによる楽曲分析が、生命力を感じさせる次元にまで深められているように感じられる。同書は、フィグーレンレーレに関する実感を伴った理解を促す力を持っていることにおいて、他の研究には見られない独特な魅力を有しているように思われる。<sup>3)</sup>

(4) シュミッツは、同書の研究の最終目標を、フィグーレンレーレによるバッハ並びにバッハの同時代者達の音楽に対する、ある特定の解釈学を設定しようとするところに置いている。同書の大部分は、フィグーレンレーレに関する説明やフィグールそのものに関する譜例をまじえての極めて具体的な分析である。それにもかかわらずシュミッツは、結論の部分で、フィグーレンレーレやフィグールは作曲者を束縛するものではなく、作曲者の創意を誘う発想の土台そのものであって、そのことを通じて作曲者は多様で豊かな創造が可能になるのだということを主張している。彼のこのような結論には、私自身も深い共感の念を覚えるし、そのことを通じて、かえってシュミッツのフィグーレンレーレに対する徹底した理解というものが感じられる。<sup>4)</sup>

(5) シュミッツがフィグールの検討のために用いたバッハの音楽作品の中に、〈オルガン小曲集〉の2曲が含まれていることは大変興味深い。とりわけ“Durch Adams Fall”の論述のために、彼は

---

1) ヴァルターは、彼の祖母を通じてバッハと血縁関係にあった。

2) ヴァルターに関しては、私自身の研究がある。Johann Gottfried Walther 研究 - 主として musica poetica の観点から - (1969年度東京芸術大学音楽学部楽理科卒業論文) を参照。

3) この点に関しては、角倉一朗編「バッハへの新しい視点」(音楽之友社)中の、磯山雅氏の論文「バッハと象徴、そして修辞学」の pp. 178-180を参照。

4) シュミッツの解釈学的志向に関しては、注3で紹介した磯山氏は、フィグーラ(同氏はフィグールではなくフィグーラと記している。)の持つ多義性やこれに対するバッハ自身の自由な態度から推測すると、体系的な解釈学が発展する可能性は薄いと考えている(p. 181)。この点については、現時点の私は、磯山氏程に割り切れる心境までには至っていない。

8頁もの分量を費やして極めて細かい説明を行っている(pp. 68-75)。このことは、その曲自体に豊かなフィギュールが含まれているからこそ、そういうかたちになったのであろうが、私が「大変興味深い」と先に述べた理由は、〈オルガン小曲集〉は、シュヴァイツァーの有名なバッハ評伝が書かれるきっかけを与えた作品で、シュヴァイツァー自身が同曲集を極めて高く評価していることにある。シュミッツがシュヴァイツァーの象徴的視点に対して極めて批判的であることは、既に述べてきた通りである。彼がこの曲にエネルギーを注いでいる理由の一つには、多分シュヴァイツァーの存在・シュヴァイツァーに対する批判意識が強く念頭にあったからではないかと考えられる。

### ◎同書の内容に関する若干の疑問点その他

(1) 歴史的視点を欠いたバッハ解釈、とりわけ象徴的表現の視点に対するシュミッツの批判は適切であると思うが、その際彼の論調は、象徴的表現の基盤にフィグーレンレーレがあるという基本的な立場を一貫して保持している。彼の立場は概ね正しいと思われるが、交差的配列法(Chiasmus)や数象徴法は最終的にフィグーレンレーレの視点から考えることができるという彼の見解(pp. 82-83)には、私は同意できない。象徴(法)という概念や言葉がバッハの時代の音楽理論に見いだされなくとも、広い意味での象徴に該当する発想は、ヨーロッパの古代におけるハルモニアの理論(数と音楽との関係)やキリスト教における豊かな象徴の世界等の歴史的背景の基に、当然バロック時代の音楽にも存在したであろうし、それはバッハの音楽を考える際にも、フィグーレンレーレと相並ぶかたちで存在していたと考えた方がよいような気がする。<sup>5)</sup>

(2) シュミッツは、フィグーレンレーレの発想をイタリアの音楽と直結させて考えようとしている(pp. 23-24)が、これは歴史的視点からするといささか問題があるように思われる。たとえ音楽についての発想の基盤がドイツとイタリアで共通しているからとはいっても、フィグーレンレーレは基本的に当時のドイツの作曲法であって、イタリアの作曲法ではないのだから、バロック時代のイタリア人の音楽的発想をフィギュールと直結させる歴史観については、より一層慎重な態度で臨んだ方がよいのではないかと思われる。<sup>6)</sup>

(3) シュミッツの研究は、表現されるべき歌詞の存在が前提となっており、純粋な器楽曲に対してフィグーレンレーレはどの程度対応し得るかという問題については、はっきりしたことはわからない。同問題についてシュミッツは、声楽だけではなく器楽の分野においても同じ発想は適用できるということ述べている(p. 24)が、どこまでそれがバッハの音楽で適用可能かということになると、疑

---

5) ブルーメがM. G. G. のバロックの項目のために執筆した論文の邦訳、「バロックの音楽」(白水Uブックス)の第六章「バロック音楽の様式的諸形態と表現手段」には、aからh迄諸々のテーマが提示されていて、そのaのテーマが「バロック音楽の他律性-修辞法」となっている。ブルーメの論述並びに発想をシュミッツのそれと比較した場合、両者はお互いに補足し合うべきであるといった思いにかられる。又、注3で紹介した磯山氏の見解でも、象徴法と修辞学の問題が対等の関係で論じられており、そのような視点はとても大切であると思われる。

6) バッハ叢書1「現代のバッハ像」(白水社)中に収められたエグゲブレヒト(Hans Heinrich Eggebrecht 1919-)の論文「バッハの歴史的位罫について」(pp. 259-302)は、フィグーレンレーレについて学習するためには、シュミッツの同書と共に大変貴重なものであると思われる。ただエグゲブレヒトは、シュミッツとは違って、バロック時代のドイツとイタリアを一体化させるよりは、むしろ両者を分離・併存させるイメージを色濃く出す方向で論述を行っており、参考になる。

問点はいくらでも出てくるような気がする。<sup>7)</sup>

(4) バロック時代には、作曲法の教えの一つにアフェクテンレーレ (Affektenlehre…情緒説…) があり、それは、フィグーレンレーレと交錯しつつ独自の存在として重要視されているものである。この教えは、歴史的にも相当複雑な変遷を辿り、多義的・多面的な側面を有しているが、その一つの重要な側面として、器楽の美的意義付けの問題との密接な関係がある。即ち、言葉と結び付いた声楽はフィグーレンレーレと一体になっているが、純粋な器楽も人間の情意的側面や自然界の音をはっきりと表すことができる、或いは表すべきであるという考えがあって、その具体的な教えとしてアフェクテンレーレが重要な役割を担った。個別的情念の叙述が器楽にも可能であるという考えは、器楽にも声楽同様の価値を認めたいという当時の音楽家達の願望の理論化であり、そこには器楽の美的価値の救出という意図が認められる。シュミッツの研究ではフィグーレンレーレの中にアフェクト保持的のフィグーレンレーレがあって、バッハよりも後の世代の例えばシャイベ等においては、アフェクト保持的のフィグーレンレーレ以外のフィグーレンレーレはもはや考慮されていないことが述べられている (p. 37)。この指摘は正しいと思われるが、シュミッツの論述中には、フィグーレンレーレとアフェクテンレーレとの複雑な絡みについての言及が殆ど認められないし、私が今ここで述べていることは、直前の (3) で述べた問題にも直結するものであり、このことに関する研究は、シュミッツの論述を補完する意味においても是非とも行われるべきであると考えられる。<sup>8)</sup>

(5) 注3で紹介した磯山氏の論文の最後には、今後は音楽修辞学に関するバッハ研究は、古典修辞学への本格的な取り組みなしには成り立たなくなりつつあることを最近の研究を例にあげて指摘している部分 (pp. 181-182) があるが、この指摘は確かに重要であろう。いずれにしてもシュミッツの提起した問題は、際限なく深くかつ難解な側面を隠し持っているように思われる。

(6) シュミッツがフィグーレンレーレは作曲家を束縛するものではないことを主張していることは、既に述べた通りである。バッハの音楽が、あのように多様でいつの時代の人にも強く訴えかけてくるものを有しているということは、彼の主張を裏付けている感じがする。シュミッツは、バッハの音楽の解釈にあたって象徴法を排除しようとしているけれども、フィグーレンレーレという時代精神の基盤の基に、バッハは作曲において人間の生と直結する象徴的発想をフィグーレンレーレの発想と絡めつつ、独自の象徴的世界を自己の中で深化・確立していったのではないだろうか。即ち、フィグーレンレーレの発想に基づいた象徴的表現法への転化と深化がバッハの心の中で生まれ、そこに幾多の歴史に残る名作が生まれたのではないだろうかと私は考えている。

---

7) この件については、注3で紹介した磯山氏の論文中の p. 181に次のような文章がある。…フィグーラはもともと、表現されるべき歌詞との関係において正当化される、破格的な技法であった。その解釈学が歌詞を持たぬ純粋器楽曲にどこまで適用しうるかは、今日なお解決をみていない問題である。…

8) アフェクテンレーレについては、音楽大事典 (平凡社) 第一巻の「音楽美学」の項目中に詳しい説明が行われており (pp. 451-452)、大変参考になる。アフェクテンレーレの部分は植村耕三氏によってその執筆が行われており、この部分の私の論述内容については、同氏の説明を部分的に借りるかたちで引用させていただいたこととお断りしておく。

## 主要参考文献

- Blume, Friedrich (和田旦・佐藤巖訳)：西洋音楽史2 バロックの音楽 (白水Uブックス 1992)
- Brodde, Otto：Johann Gottfried Walther (1684–1748) Leben und Werk Kassel, Basel (Diss. Münster 1937)
- Eggebrecht, Hans Heinrich (後藤暢子訳)：バッハの歴史的 position について (バッハ叢書 I pp. 259–302 白水社 1976)
- Pirro, André：L'Esthétique de J. S. Bach (Minkoff Reprint Genève 1973)
- Schering, Arnold：Bach und das Symbol. Insbesondere die Symbolik seines Kanons, Bach-Jahrbuch 1925 pp. 40–63 (Johnson Reprint Corporation 1967)
- Schering, Arnold：Bach und das Symbol. 2. Studie. Das "Figurliche" und "Metaphorische", Bach-Jahrbuch 1928 pp. 119–137 (Johnson Reprint Corporation 1967)
- Schering, Arnold：Bach und das Symbol. 3. Studie. Psychologische Grundlegeung des Symbolbegriffs aus Christian Wolffs "Psychologia empirica", Bach-Jahrbuch 1937 pp. 83–95 (Johnson Reprint Corporation 1967)
- Schmitz, Arnold：Die Bildlichkeit der wortgebundenen Musik Johann Sebastian Bachs (Laaber-Verlag 1980)
- Schweitzer, Albert：J. S. Bach Le Musicien-Poète (Editions Maurice Et Pierre Fœtisch Lausanne 1967)
- Schweitzer, Albert：J. S. Bach (Breitkopf & Härtel Wiesbaden 1979)
- Schweitzer, Albert (浅井真男・内垣啓一・杉山好訳)：バッハ (白水社 上巻・中巻は1965、下巻は1966)
- Walther, Johann Gottfried：Praecepta der Musicalischen Composition (VEB Breitkopf & Härtel Musikverlag Leipzig 1955)
- 服部幸三：フィグレンレーレについて (音楽学 第7巻 II 1961)
- 片岡啓一：Johann Gottfried Walther 研究-主として musica poetica の観点から-(1969年度東京芸術大学音楽学部楽理科卒業論文)
- 植村耕三：[17・18世紀] [アフェクテンレーレ] (音楽大事典 第1巻「音楽美学」の項目より pp. 450–451 平凡社 1981)
- 磯山雅：バッハと象徴、そして修辞学 (角倉一朗編「バッハへの新しい視点」より 第九章 pp. 169–187 音楽之友社 1988)

A Study on the Contents of *Die Bildlichkeit der wortgebundenen Musik Johann Sebastian Bachs* by Arnold Schmitz

Keiichi KATAOKA

*Die Bildlichkeit der wortgebundenen Musik Johann Sebastian Bachs* by A. Schmitz is a special book on “Figurenlehre” which played an important part in the composition’s method of the baroque era. This book deals with “Figurenlehre” in general and the relation of it to J. S. Bachs music from the viewpoint of the historical method. Schmitz has an opinion that Bach’s music connected with the text is to be interpreted on the base of “Figurenlehre”, and not to be interpreted from the viewpoint of symbolic expression.

Until now, I have studied Bach’s music from the viewpoint of symbolic expression, so, in this study, I had a hope to broaden my outlook by understanding and investigating Schmitz’s opinions.

As a result of this study, I could confirm that his opinions were very important, but I became aware of some doubts and issues that I could not agree with him or I was dissatisfied with his opinions.